

聴覚障害児教育におけるローカルとスタンダード —インドネシア・バリ島の聴覚障害児教育—

日本社会福祉学会
第68回秋季大会

○笹谷 絵里
花園大学
(009142)

キーワード：バリ島、聴覚障害児教育、Kata Kolok



1) 研究目的と研究の視点①

目的：

本発表は、インドネシアのバリ島における聴覚障害児教育について、国の定める特別支援教育（聴覚障害児教育）と地域の小学校での特別支援教育を比較することで、インドネシア・バリ島の聴覚障害児教育の現状を明らかにすることを目的にしている。

視点：

インドネシアのバリ島北部ブンカラ村では、遺伝性の聴覚障害を持つ村人が約1割存在するとされる。だが、村人の9割が手話を話せ、学校でも全ての授業に手話通訳がつく。ブンカラ村は村人すべて手話が使え、Kata kolokという手話が長年使われているとされる。

2) 研究目的と研究の視点②

先行研究でも、

- ・ Bengkuluの聴覚人口の少なくとも57%がKata Kolokを理解し、使用することができ、熟練度はさまざま (Marsaja 2008)
- ・ 2011年の調査では、村人の57%がKata Kolokを使用でき、村の97%がバイリンガルである (DeVos 2014)

⇒なぜ村の人々の多くが、Kata Kolokを使用できるのか。
その理由は小学校で普通学級に聴覚障害を持つ子が在籍し、
聴者と一緒に学んでおり、聴者の子どもも手話が理解できるためとされる。

このように、ローカルな地域での聴覚障害児教育と国の定める
スタンダードな聴覚障害児では、教育内容や卒業後の進路や状況は
同じなのか/異なるのかを2つの学校を比較することで明らかにしたい。

3) 研究方法と倫理的配慮

研究方法

インタビュー調査の概要は以下の通りである。

調査時期は2019年1月20日から2月1日までの11日間である。

バリにある特別支援学校（聴覚、自閉、知的など）およびインドネシアのバリ島にあるブンカラ村（シガラジャ）にある小学校を訪問し実施した。インタビュー対象者について、ブンカラ村では、小学校教員、村人、聴覚障害を持つ当事者へのインタビューを実施した。バリにある特別支援学校では、校長および教員数名にインタビューを実施した。

倫理的配慮

倫理的配慮として、日本社会福祉学会の倫理指針を遵守し、被調査者に対して事前に研究の概要を説明し、個人情報保護等の取扱いに関する説明をインドネシア語（通訳を介して）で実施し、同意を経たのちに、「立命館大学における人を対象とする研究倫理指針」に従ってインタビューを実施した。

4) 研究結果①

ブンカラ村と村の教育① 学校教育の現状



- * 現在、村の小学校に在籍している聴覚障害の児童は3名であり、村に住んでいる児童は1名のみであり、他の2名は村外から通学していた。
- * 通常の授業は聴者と聴覚障害児は分かれて授業を受けており、一緒に授業を受けているわけではないことも明らかになった。
- * ろう者のバリ舞踊が有名であるとされたが、聴者（マジョリティー）と聴覚障害児・者（マイノリティー）では踊りの習い方や理解方法が異なるため、一緒には行われていなかった。

5) 研究結果②

ブンカラ村と村の教育②

卒業後の進路や状況



- * インドネシアでは、留年制度があるため、一定の水準に達しない場合は、留年となる。聴覚障害のある子の場合、は、6年で卒業できていないことも少なくない。
- * 中学校では、聴覚障害のある子を受け入れてくれる学校が少なく、小学校を卒業後に中学校に通えていない子もいる。
- * 村では、「Kata kolok」が使用されているが、学校教育では、インドネシア手話（Bisndo）や国際手話（SIBI）を中心に教えており、Kata kolokは日常生活の中のみで使用されていた。



6) 研究結果③

ジンバラン国立特別支援学校① SLB B Negeri PTN Jimbaran

学校教育の現状

- * 国立の学校のため、教員もインドネシアの伝統的な衣装を着用、音楽の授業では、聴覚障害のある児童・生徒も伝統的な衣装を身にまとい、バリの伝統音楽を学ぶなど学び方に工夫がされていた。
- * 知的障害、自閉症、聴覚障害のある子が同じ敷地内で学んでいた。(視覚障害のある子はテンパサルにある別の学校)
- * 学校での学ぶ時間も7:30-11:30や7:30から13:30など各児童の状況に合わせてカリキュラムを変更している。
一方で、送迎は幹線道路に面しているため親や保護者の協力が必須となっていた。

7) 研究結果④

ジンバラン国立特別支援学校 ② SLB B Negeri PTN Jimbaran 卒業後の進路や状況



- * 国立の学校のため、国際手話（SIBI）を学ぶことは、国の方針であり、英語を学ぶのと同じ位置づけと考えられていた。
- * 卒業生の進路はこの学校で仕事を得るなど、多岐にわたった。
- * 学校では、SIBIを中心に教えているが、卒業後は、地域の手話を使用することが多い。また、家族で手話を使っている場合は、家族がSIBIを使えない場合もあり、教員は複数の手話を理解し指導していた。

8) 考察

- ・ 村の小学校に在籍している聴覚障害の児童は3名であり、**村に住んでいる児童は1名のみ**であり、他の2名は村外から通学していた。通常の授業は聴者と聴覚障害児は分かれて授業を受けており、**一緒に授業を受けてなかった。**
- ・ 国立特別支援学校では、様々な障害のある子が同じ敷地内で学び、**学び方もその子に合わせたもの**になっていたが、送迎も含め、**親の協力が学ぶ上で必須**となっていた。
- ・ ブンカラ村の小学校も国立特別支援学校も**教育の中心は、国際手話（SIBI）**であり、世界でも通用することが方針とされていたが、卒業後は地域の手話（Kata Kolok）やインドネシア手話（Bisndo）が生活の中で使用されることが多く、**学校教育での手話の学びと日常生活で使用する手話に乖離**があることが明らかになった。

9) 引用・参考文献

- DE VOS, Connie, 2014. 'Absolute spatial deixis and proto-toponyms in Kata Kolok'. In Anthony JUKES, ed. Deixis and spatial expressions in languages of Indonesia. NUSA56: 3-26.
- Friedman, T.B., J.T. Hinnant, R.A. Fridell, E.R. Wilcox, Y. Raphael, & S.A. Camper. 2000. DFNB3 families and Shaker-2 mice: mutations in an unconventional myosin, myo 15. *Advances in Oto-Rhino-Laryngology* 56, 131-144.
- Liang, Y., A. Wang, F.J. Probst, I.N. Arhya, T.D. Barber, K.S. Chen, D. Deshmukh, et al. 1998. Genetic mapping refines DFNB3 to 17p11.2, suggests multiple alleles of DFNB3, and supports homology to the mouse model shaker-2. *American Journal of Human Genetics* 62(4). 904-915.
- Marsaja, I. G. 2008. *Desa Kolok - A Deaf Village and its Sign Language in Bali, Indonesia*. Nijmegen: Ishara Press.
- Winata, S., I.N. Arhya, S. Moeljopawiro, J. T. Hinnant, Y. Liang, T.B. Friedman, & J.J. Asher. 1995. Congenital Non-Syndromal Autosomal Recessive Deafness in Bengkulu, an Isolated Balinese Village. *Journal of Medical Genetics* 32(5), 336-343.